

チェルノブイリ通信

<https://www.cher9.org/>

NPO法人
チェルノブイリ医療支援ネットワーク
〒812-0013 福岡市博多区博多駅東2-5-11-5F
TEL/FAX : 092-260-3989
E-mail : jimu@cher9.org



チェルノブイリ医療支援ネットワーク（CMN）は、チェルノブイリ原発事故で被災した人々のために、現地から求められる医療支援を行います。この活動を通して、日本とベラルーシの人びとの心と心のつながりを深めます。

No.

137

特集

原発事故と甲状腺がんの現状

CONTENTS

原発事故と甲状腺がんの現状
福島訪問レポート（1）
飯舘村の秋
コラム ミンスクの1日
福島訪問を振り返る



原発事故と甲状腺がんの現状

2024年9月24日
甲状腺がん支援グループあじさいの会 共同代表 千葉親子

はじめに

2011年3月11日、東北地方太平洋沖で大地震が発生

東日本大震災で大きな揺れと共に巨大津波が太平洋沿岸を襲いました。東京電力福島第一原発では15.7メートルの津波が押し寄せまし

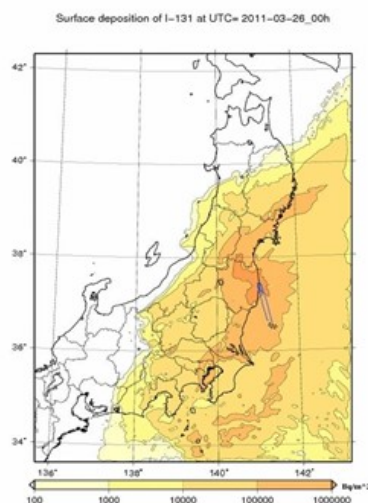
た。福島第一原子力発電所は、3月12日、1号機が水素爆発、14日、3号機の水素爆発、2号機はベントをして、それぞれがメルトダウンを起こしました。人類が経験したことのない原発過酷事故の始まりです。福島原発事故は、多くの犠牲を強いながら、復興政策の陰に多様な課題を浮き彫りにして、13年が過ぎました。東電も国も事故の責任を認めず、事故原発の危機的状況は依然変わらなまま、帰還困難地域の避難指示は部分的に解除されました。県内の7割以上の自治体が反対又は慎重に、との意見書を採択しているにもかかわらず、国と東電は昨年、汚染水の海洋投棄をはじめました。福島県は、小児甲状腺がんについて、原発の影響とは

考えられないとされています。原子炉が爆発したことで、大量の放射性核種が大気中に流出し、北は一関市、南は静岡のお茶の葉が汚染されていたとの報道がありました。（資料1）事故の起きた日の16時36分に、「原子力災害対策特別措置法第15条1項2号」の規定により「原子力緊急事態宣言」が発令されました。平常時の被ばく線量の限度は年間1ミリシーベルトですが、原発事故などの緊急時には年間（又は一度に）20 mSvから100 mSvの範囲で避難や除染の基準を決めています。しかし、13年経った現在も福島県の被ばく線量の限度は20 mSvに据え置かれ「緊急事態宣言」が発令されたままになっています。

チェルノブイリ原発事故で、小児甲状腺がんの多発症

1986年の、チェルノブイリ原発事故後に小児甲状腺がんが多発し、放射性ヨウ素被ばくと小児甲状腺がんの発症が相関し、唯一原発事故

による病気とWHOが認めました。福島県はその事に学び、2011年10月から、事故当時18歳以下の38万人を対象に「県民健康調査」により甲状腺エコー検査を実施しました。放射能は、自然環境を汚染し、豊かな自然がそこにあるが手に行き届かず、山菜、農産物、魚介類などから、基準値を超える放射性セシウム、放射性ヨウ素が検出され、摂取制限がなされました。200キロも離れた東京金町浄水場でも基準値を超える放射性ヨウ素が検出され、乳幼児のいる家庭に、ペットボトルの水が配られました。県民生活が混乱騒然としてい



資料1
原子力開発機構によるヨウ素
拡散シュミレーション

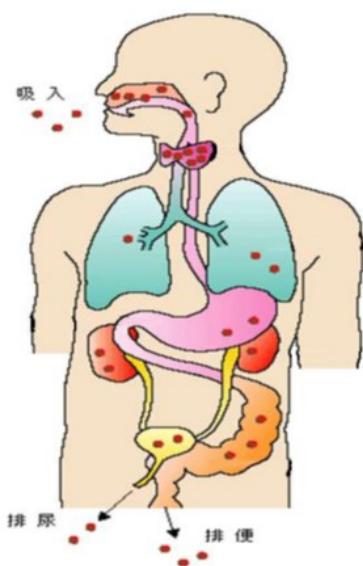
た、3月19日、長崎大学の山下俊一教授が福島県の要請で「放射線健康リスク管理アドバイザー」として就任しました。山下教授は着任早々「今のレベルならば、ヨウ素剤の投与は不要だ」と言って、「放射能の恐怖を取り除く」を主眼に各地で講演活動をしていました。有名な言葉に「ニコニコしている人には放射能は来ない」「年間100mSvまで浴びても病気になる」など話していました。不安に思っていた県民も、「そんなに怖がらなくても、避難しなくてもいいのだ」と思った方も少なからずいたことも事実です。山下氏はわずかその4日後の23日、SPEEDI（緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム）の結果を見て「ありやーと思いました」「まさかこんなに広範囲に汚染されているとは思わなかった」「日本の原発にはフィルターが付いていると思うた」「避難した住民は国の指示でヨウ素剤を飲んでいと思った、服用すべきであった」（朝日新聞2013年11月8日プロメテウスの罠）等などと「放射線健康リスク管理アドバイザー」として県民の健康を守るべき立場の人とは思えない言葉に驚きました。原発事故が起きて、被ばくによる一歳児の甲状腺等価線量が

100μSv以上になる時には、安定ヨウ素剤を飲むべきとするWHOの指針がありました。チェルノブイリ原発が事故を起こしたときも。旧ソ連は事故を隠していました。事故を公表せず、安定ヨウ素剤は配布されなかったと聞きます。ウクライナやベラルーシでは100mSv以下の被ばくでも、小児甲状腺がんが増加しました。ポーランドでは、チェルノブイリ原発事故を疑い、知り、ヨウ素剤を配布し、小児甲状腺がんが増えなかったとのことです。そのことから、WHOは、未成年や妊婦は1歳児の甲状腺等価線量が100ではなく10mSvを超える被ばくが予想されるときは安定ヨウ素剤を飲むべきと、1999年に指針を変更しました。しかし、当時の原子力安全委員会（山下俊一、鈴木元、明石真言）はその指針を受け入れず、従来通り年齢に関わらず100mSvのままにしていました。

放射性ヨウ素と甲状腺

放射性ヨウ素の半減期は約8日間です。昆布や海産物などを常に食べ甲状腺にヨウ素が十分あれば放射性ヨウ素は取り込まれにくく、甲状腺が

んにもなりにくいのです。甲状腺にヨウ素が不足していると、放射性ヨウ素が甲状腺に取り込まれ、がん発症の危険性が高まります。原発事故のような大量の放射性物質の拡散を予想される時は、安定ヨウ素剤を服用すれば、がんの発症の危険性が軽減されます。（資料2）福島原発事故では、それらのことを予測できたにもかかわらず、対策がなされませんでした。日本では、原発から5キロ圏内の自治体住民にはあらかじめ配布をし、30キロ圏内は、事故が起きてから配布を検討することになっています。双葉郡内11市町村は被ばくが予想されながら、実際に配布され服用したのは、原発作業員や福島県立医大関係者と原発立地の双葉町、大熊町の自治体と、自主的判断でヨウ素の配布を実施しました三春町だけでした。



資料2

出展 (財)原子力安全研究会：
緊急被ばく医療研修のホームページ
http://www.remnet.jp/lecture/b03_03/index.html

県民健康調査と甲状腺がん患者を取り巻く社会現象

平常時、100万人に1～2人の割合で見つかった小児甲状腺がんですが、甲状腺検査の1巡目（2011年～13年）が行われ、約30万人が検診を受け、その内116人が悪性ないし、悪性疑いと診断されました。102人が手術を受け101人が、がんと確定されました。（うち1人は良性）。2巡目（2014年～15年）は、約27万人が検査を受け71人が悪性ないし悪性疑いと診断されました。その内33人は1巡目では異常なしと診断されていました。検査報告をした県民健康調査検討委員会は「甲状腺がんの罹患統計から比べて数10倍多く発見されている」としながら「将来的に死に結びついたという事がないがんを多数診断されている可能性がある」と発表し過剰診断論を示唆していました。福島県立医大で多くの患者の手術をしている鈴木眞一教授は、2019年の日本内分泌学会で「医療倫理に従って手術をしている、切らなくても良い患者はいなかった」と否定しています。2015年検討委員会は中間報告を発表しました。「被ばくの影響とは考えにくい」として、チェルノブイリとは違くと5つの比較

をあげました。

- ①チェルノブイリより被ばく量が少ない
- ②発がんまでの期間が短い
- ③事故当時5歳以下の子どもはいない
- ④地域差がない
- ⑤将来死に結びつかないがんを多数発見している。

と報告しました。2024年8月、第52回「県民健康調査検討委員」で公表された悪性ないし悪性疑いの患者は338人と報告がありました。

患者、家族をつなぐ

甲状腺がんは被ばくの影響とは考えられないという喧伝が、患者家族に不安や悲しみを与えました。県民健康調査では「スクリーニング検査で見つけないでもいいがんを見つけている」と言われ、甲状腺検査とか被ばくを話題にすると「まだそんなこと言っているの、福島が汚れているみたいに思われる」と復興に影響が出ると「風評加害者」扱いにされ、口にすることも憚られ、孤立状態にありました。2016年「甲状腺がん支援グループあじさいの会」を家族、



資料3
展出 あじさいの会

当事者、支援者で立ち上げました。「差別を受けるのではないかという恐怖で長い間誰にも言えなかった」と、同じ悩みを抱えた人が話し合う事で安心して話し合える居場所となりました。概ね2カ月に一度の定例会を持ち、カフェ事業（お茶会、調理実習、体力づくり）アウトリーチ事業（医師相談会、学習会）調査アドボカシー事業（講演会、情報の収集、意見交換会）などを通して、（資料3）理不尽な事が浮き彫りになってきました。様々な課題や意見を、県や国に対し要望活動を行いました。2022年1月欧州連合（EU）が、地球温暖化対策に二酸化炭素を出さない原発を、地球温暖化

対策に質するグリーンな投資先として認定する方針を示したことに對し、元首相経験者の5氏（村山、小泉、細川、菅、鳩山、）が、原発推進は未来を脅かす「亡国の政策だ」と批判し、方針の撤回を求める書簡をEUに送りました。その書簡の中に「福島では多くの子どもたちが甲状腺がんに苦しみ」という記述がある事に対し、国や県は「復興に頑張っている福島県がいわれない差別や偏見を助長する」と抗議をしました。内堀県知事は、定例記者会見で、「復興に邁進している福島県にとって実に遺憾である」とコメントをしたのです。小児甲状腺がんの多発と、がんに苦しむ患者の存在は事実なのに、知事が「遺憾である」と、政府と同じようなコメントを発表したのをニュースで見た家族は「私の子どもは遺憾な存在なのですか」と憤り、あじさいの会は患者・家族と共に、知事に対する抗議の質問書を提出しました。県は、被害者に寄り添い、甲状腺検査で早期発見・早期治療の機会を保障し、甲状腺がん多発の原因解明に先頭となって取り組むべきなのです。また、同年7月、UNSCEAR（原子力放射線の影響に関する国連科学委員会）の委員が2020/2021年報告書を持って来日しました。驚くことに、福島県の乳幼児の事故一年目

の甲状腺平均吸収線量は2013年報告にくらべ推定値が大幅に低くなっているのです。その理由として、

①日本の建物はコンクリートで放射能の遮蔽があった。

②日本人は昆布など海産物をたくさん摂取しているから甲状腺に放射性ヨウ素の取り込みは少ない。

③日本は出荷制限が早かった、

などがあげられています。そして、甲状腺がんを含めたあらゆるがんは、全ての年齢層に増えているし、今後も増えない。次世代への影響も起きていない、と結論づけていました。その結論に導いた日本からの資料提供には、嘘とデータの誤りがあると、高エネルギー加速器研究機構の黒川眞一名誉教授が「間違ったデータやグラフが複数ある」「論文引用の誤りで科学的な基礎知識に欠ける」と、データメ報告書の撤回を求めました。また、3・11甲状腺がん子ども基金代表理事で医学博士の崎山比早子氏は「日本人は和食で食品からヨウ素を摂取している」として50年前の日本人の食習慣を根拠にしたデータを基に放射性ヨウ素の被ばく線量を半分に推計したことを問題視し「今の食事は

欧米化並み、世界平均と変わらない」と指摘し「報告書は明らかな過小評価」と反論しました。現場、現状とはかけ離れた報告書に驚き、あじさいの会は来日した、UNSCEARの事務局長に、患者と共に抗議書を手渡しました。国、県と原発推進側にとって「国際的な専門家の知見は・・・」とUNSCEAR報告書は原発事故の被害を矮小化する推進側の大きな後ろ盾となっている事は明らかです。

原発回帰と世論形成に抗う

UNSCEAR報告書以後、急速に岸田政権は原発回帰に舵を切りました。2022年には原発再稼働を発表し、23年にはGX脱炭素で電源法成立、新增設や60年超運転を認めました。今年8月には柏崎刈羽そして女川原発再稼働と福島第一原発の過酷事故を忘れたかのように原発回帰政策を押し進めています。「過剰診断」として、県民健康調査での甲状腺検査を縮小に向かわせ、原発の影響とは考えられないとして事故の過小評価へと世論を導いて世論形成がなされてきています。最近、ハフポスト日本版の取材で緑川早苗氏が「甲状腺がんは放射線被ばくの結果ではない」「子どもたちの善意を犠牲

にした理論的に問題のある検査」としてインタビューを受け、3回シリーズで掲載すると知りました。「被ばくの影響とは考えられない」という前提で、原発事故に関わる多くの事が、実態とはかけ離れたところで、語られ、誤ったデータで決定付けられていることの理不尽さを改めて実感しています。福島の実状の正しい情報を私たちは伝えて行かなくてはならないと思います。

沈黙を破り若者6人が集団提訴!! (資料4)

2022年1月、事故当時福島に住んでいた6歳〜16歳の男女6人が東電に対して健康被害に対する損害賠償を求め集団訴訟を起こしました。裁判は2024年9月11日、第11回目を迎えました。東京地方裁判所前に多くの支援者が集まりました。今回も207人が85席の傍聴券を求め並びました。裁判所には原告一人ひとりの意見書が提出され、若い6人の原告は自らの言葉で意見を述べてきました。発症年齢が若いことで、進路、就職、結婚など様々な制約がおきることは事実です。悩みや不安にさいなまれたこの年月を、言葉にしました。「今まで甲状腺がんの事を誰にも言えなかった」「中学2年

生で甲状腺がんと宣告された時は驚きました。再発の時は驚く事もなくなった残念だった」「生涯薬を飲まなくてはなりません」「大学2年生の時宣告されました」「何も聞いていないのに、医師から原発事故とは関係ありませんと言われました、なぜ言い切れるのか辛い気持ちになりました」「遠隔転移もあり完治は難しい、将来がとても不安です」噛みしめる言葉は涙に震えていました。なぜ若者たちが勇気を持って裁判に立ち上がったのか、初期被ばくの調査も



資料4
出展 あじさいの会

されず、嘘、隠蔽、データ改竄に、不信を募らせ、あった事を無かったことにはさせられない思いが、若い患者の背中を押したことは言うまでもないと思います。この裁判で、UNSCARの問題、県民健康調査の問題、被ばくの問題、非科学的な問題が一つずつ解き明かされてくることでしょう。同じ思いを抱えた患者がたくさんいるのだということに国も県も、再認識してほしいと思います。「なぜ私が甲状腺がんになったのか知りたいのです」という、患者の素朴な問いかけに司法はどのように答えるのでしょうか、科学的にも人道的にも、原発事故被害の実態が明らかになる重要な裁判をいま闘っています。

(次回…第12回口頭弁論の予定は12月11日
(水) 14:00〜 東京地裁103号法廷)



千葉親子

甲状腺がん支援グループあじさいの会 共同代表
福島県会津坂下町元町議。
精神障害者の家族の会を立ちあげるなど福祉活動に取り組み、2016年に厚生労働大臣賞受賞。
精神保健福祉ボランティア「ビオラの会」会長

2024年秋 福島訪問レポート (1)

訪問を通して知ったことや考えたこと、感じたことについて報告していただきました。

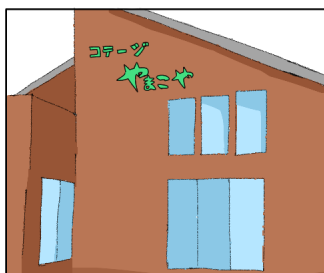
大学生4人が
参加しました



2024年
9月8日～9月12日

福島訪問

○川俣町
コテージやまこや



○飯舘村
長泥コミュニティセンター

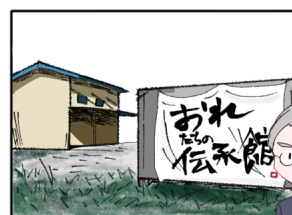


←飯舘村オリジナル品種
白いかぼちゃ・いいたて雪っ娘

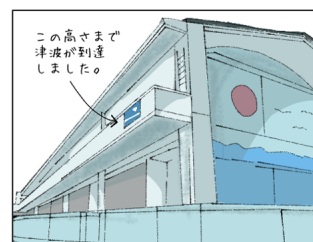


←山木屋在来そば・高原の宇宙
ぼたもち

○南相馬市
おれたちの伝承館



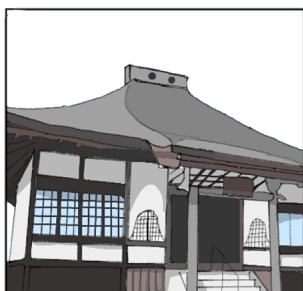
○浪江町
震災遺構・請戸小学校



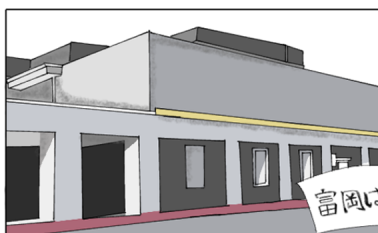
○二本松市
農家民宿・遊雲の郷



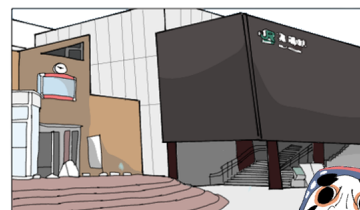
○楢葉町
宝鏡寺・伝言館



○富岡町
アーカイブミュージアム



○双葉町
双葉駅・双葉町役場



双葉町ダルマ市のだるま→



他にも沢山の場所を
訪れました



2024年秋福島訪問 中田青来

私は今回、初めての福島訪問を行い、東日本大震災から現在にかけての福島の状況を自分の目で見て、知ることができました。これまで、災害に関するニュースや学校での避難訓練、被災された方々の避難生活について何度も学んできたが、災害が起こった当時の話に焦点を当てた話が多く、現在の福島がどのように変化していかかといった現状を知る機会はほとんどなかったように思います。そのため、被災した当時の状況に加えて、福島の現状を自ら知る貴重な機会となりました。



(写真1) 普通教室

○震災遺構 浪江町立請戸小学校

まず、私たちは請戸小学校に行きました。請戸小学校は東日本大震災により、大きな被害を受け震災遺構として保全・一般公開されています。校舎に津波がどのくらいの高さまで来たかの表示があり、1階が完全に浸かる波が押し寄せたことが分かります。もし、逃げ遅れていたら助かることは不可能であったと考えられます。津波により、教室の窓ガラスは割れ、床や天井が剥がれ、机などは流されてしまっていました。津波が来る前の写真が展示しており、比較してみると教室ごと人々の思い出も流されてしまったように感じました。

また、給食の調理場では調理器具が重なり津波の勢いで出入口につまっているような感じでした。



(写真2) 体育館

た。このように、津波の恐ろしさは波の大きさや勢いだけでなく、津波に押し流されてきた様々なものが一緒に襲いかかってくるという点ではないでしょうか。

これは、校舎の大きな柱の間に大きな幹の流木が挟まっていたことや、現在は撤去されていたが実際に調理場近くの壁に外から自動車が入り込んでしまっていたことから分かります。請戸小学校の体育館を外から覗いてみると、卒業式の幕が下がっていました。卒業式練習が行われていた。被災した小学生は、思い出の詰まった請戸小学校で卒業式を迎えたかったと思います。卒業という大切な機会をも奪う津波は、人々に苦しみしか与えないと感じました。

私は津波の恐ろしさは防災訓練など様々な場面で教えられてきましたが、漠然と思うだけで実際には現実味がありませんでした。しかしながら、今回、請戸小学校を自分の目で見て、感じることで津波の恐ろしさとともに絶望感を体感しました。

津波が到達していない2階を見ることで、より同じ建物なのかと信じられない気持ちになります。津波によってすべてを奪われたという言葉は大袈裟ではないです。

また、2階に当時、請戸小学校に通っていた方々の寄せ書きが黒板に書かれており、再び会える日を願ったものや福島復興を応援するものなどがあり、たとえ住むことができなくても故郷を強く想っていることが伝わってきました。

○東日本大震災・原子力災害伝承館

東日本大震災・原子力災害伝承館は福島県双葉町にあり、2020（令和2）年9月20日に開館し、福島で起きた地震、津波、東京電力福島第一原発事故という複合災害の実態や、復興に向けた歩みが展示されています。東日本大震災について多方面から、知り、学ぶことができました。まず、実際の津波の映像などを見ることが、私たちが今いる場所も津波が来ていたこと、いかに復興が大変なのか、どのように福島の人々が向き合ってきたのかを、復興の過程などを通して学びました。

東日本大震災による、全国の死者・行方不明者1万8000人以上となっています。

福島県内の犠牲者は4,100人以上で、このうち東京電力福島第一原子力発電所事故に伴う避難生活での体調変化や過労など、間接的な原



（写真3）双葉駅

因で亡くなる「震災関連死」は2,300人を超えており複合災害の深刻さがわかります。現在も原子力災害により、福島県では25,000人以上の方が故郷を離れての生活を強いられており、地元の人々が戻ってくるためには様々な課題が積み重なっています。

○とみおか・アーカイブミュージアム

とみおか・アーカイブミュージアムにも行きました。富岡町で受け継がれてきた地域資料や、東日本大震災と原発災害で生じた震災遺産が収蔵・展示されています。

とみおか・アーカイブミュージアムには津波によって流されたパトカーが展示してあります。パトカーは激しく変形し、津波の激しい勢いを

目の当たりにしました。パトカーに乗っていた警官の方々は、町の人々の命を守るため、ギリギリまで避難指示を出して回っていたそうです。

○双葉町役場・双葉駅

震災後、建て替えられた双葉町役場と双葉駅を見てきました。

双葉町は2022年8月30日に帰還困難区域のうち、福島県双葉町の特定復興再生拠点区域（復興拠点）での避難指示が解除され、居住できなかった11年間で比較すると居住できるようになって2年しか経っていないのです。そのため、町の基盤を1から作り上げることになり、役場や駅を中心に復興を目指している最中です。周辺には、新しく郵便局もでき、少しずつ変化してきています。

○モニタリングポスト

福島では各地にモニタリングポストがあります。モニタリングポストとは本来、発電所周辺への放射線の影響を把握するために、空間の放

射線量を連続的に測定している設備です。

しかしながら、福島では発電所周辺だけでなく、遠く離れた場所でも設置されており、県内に約3600地点にあります。14年が経ったことで、事故当時より放射量が減ったとはいえ、完全に安全だと言えるまで果てしない時間がかかるでしょう。道路の途中や公園、人が集まる施設など様々です。私は初めて見ましたが、福島の方々にとっては当たり前の光景となっています。特に雨の日は雨とともに地上に放射線が降りて来ってしまうため、気を使う必要があります。

○防潮堤と植林

津波の浸水被害を受けた地域では、防潮堤や緑地、道路、土地利用など複数の防御手段を組み合わせた防災対策が行われ、郡山海岸付近も植林がされていました。防潮堤は大規模なものが海岸に沿って作られており、防潮堤の周辺などに植林されていました。植林された木々は今後、長い年月をかけ成長していき、福島を守る重要な存在になるのだと思いました。

○避難計画

福島県は、将来起こり得る原子力災害に備え、住民の避難などの緊急対策を迅速に実施す

るため、2014年に「福島県原子力災害広域避難計画」を策定しました。この計画では、関係市町村ごとに避難先や基本的な避難経路を定め、広域避難の基本的な枠組みを示しています。避難計画の策定は自治体規模であるため簡単にいっても、個人レベルでは避難経路の確認や非常食等の準備などできることため、まずは自分たちができることから取り組んでいくことが大切だと思います。

最後に…

私は今回、福島訪問に初めて参加してニュースやインターネットで得た情報はほんの一部であったと思いました。インターネットなどを通して知ることには限界があり、実際に行かなくては知ることができない事柄も多くありました。請戸小学校で床やドアの歪みや崩壊といった、実際の津波の被害を目の当たりにし、肌で感じる恐ろしさというものがあるのだと思いました。福島訪問で印象的だったのは、伝承館や道の駅といった場所には人がいるのですが、少し離れるだけで、日曜日だとは思えないほど人がいなかった点です。建物や道路などの復興が進んできても、人がいる状態に回復させる



(写真4, 5)

モニタリングポスト



(写真6) 植林

ことの困難さを感じました。

以前の福島訪問では、虫の鳴き声すら聞こえて来なかったそうです。しかし、今回は虫の鳴き声が聞こえてくるようになっていたことから、福島の自然も以前より変化してきていることがわかります。震災から14年経ってやっと自然を感じるようになったことから、放射線の影響がどれほどのものか理解することができません。今後、町の復興とともに自然に関してもより豊かになっていってほしいです。

これらの状況は福島に行かなければ知ることができなかった貴重な情報でもあります。そのため、福島訪問を定期的に行うことは福島の今を知り、伝えていくという大きな意味があると思います。また、糸島市や福岡市西区、早良区の一部は玄海原子力発電所50キロ圏内にあるため福島の現状を知ることが大切ではないでしょうか？私にできることは少なくとも福島の現状を他人事だと思わずに、受け止め、一緒に考えていくことは今後も行っていきたいと思っています。

初の福島訪問を通して

石井楽来（大学4年生）

9月8日、私は生まれて初めて、福島県を訪れました。福岡で生まれ育った私にとって、東北地方は全く馴染みがなく、北の方にある遠い県、くらいのイメージでした。そんな私が福島訪問を通し、見たこと聞いたこと、学んだことをお伝えできればと思います。

今年で東日本大震災から13年が経過することです。震災当時、私はまだ小学生でした。テレビが東日本大震災のニュースで埋め尽くされ、原子力発電所について詳しくは分からないながらも、大変なことが起きてるんだ、そう思いながらテレビを眺めていたのをわずかながらに覚えています。「13年」と年月だけ聞くと、とても長いように私は感じます。当時の小学生はみな高校を卒業するほです。しかし震災からの復興、と考えると「13年」はまだ充分では無いようでした。

今回の福島訪問では、まず一日目に福島の道の駅や震災遺構である「請戸小学校」、「郡山海岸」や「富岡漁港」、東日本大震災に関する資料が多くある「東日本大震災・原子力災害伝

承館」「富岡町アーカイブミュージアム」などを周り、見て学ぶ日となりました。そして二日目に富岡町や双葉町の散策、その後の三日間はそれぞれ福島をよく知る方々にお話を伺いながら、福島の様々な場所の案内をして頂きました。

私が一番印象に残ったのは、一日目に行った「請戸小学校」です。ここはなるべく被災当時のまま残されており、1階部分では震災の悲惨さを直接感じることが出来る建物となっています。また2階部分は資料や映像が展示されているコーナーがあります。見学ルートがあり、実際に建物を直接見ることが出来ます。

通路となる部分は少し片付けられていたものの、教室など至る所に被災の痕跡が残っていました。吹き飛び無くなった窓や壁、崩れ落



【写真1】

「請戸小学校」教室内



【写真2】

「請戸小学校」体育館

ちた天井に木の破片の散らばる床。ぱっと見た限りでは自分の通っていた小学校との違いが大きく、映画やドラマのセットだと言われた方がまだ納得できそうな光景が広がっていました。

しかし黒板や電気のスイッチ、壁に貼られたポスターなど、自分の記憶にある小学校との共通点の一つ一つにするたびにじわじわと、ここが実際に被害を受けた場所であることの実感が込み上がり、津波の恐ろしさを改めて感じました。

私達は実際に津波の来た海岸も見に行きました。海周辺には人の気配や建物がほぼなく、またここでも津波被害の大きさを感じることとなりました。双葉海水浴場付近には、最大津波の痕跡高の見晴台があり、上まで登ることができ

ました。津波による浸水は30センチメートルでも流される恐れがあり、また1メートルを超えると想定上の死亡率は100%になるとされています。そう考えるとここ双葉海水浴場での最大標高16.5メートルがいかに危険であったかが分かります。

私が次に強く印象に残った場所として、最終日に案内して頂いた「大規模発電施設（メガソーラー）」があります。見渡す限り、端が見えない程にソーラーパネルが建ち並んでいました。放射能汚染で農業が再開できない耕作放棄地を会社が借りて利用しているとのことでした。

利用の難しいスペースを有効に活用する、というアイデアはすごく面白いなと感じました。しかし、工事に伴って山肌が露出したことによる泥水の流出事故や景観、ソーラーパネルの廃棄に関する問題などで地元の方々からは反対意見も多く出ているとのことでした。また、ここで発電された電気は東京に送られるのと、ここで、より複雑な心境に陥る方も多いのではないのでしょうか。地元の方々の意見、国や市町村の意見、企業側の意見、全員が納得できる道を進むことの難しさを感じました。

そして最後に、私がこの五日間を通して最も印象に残ったのが、福島町の並み風景です。様々な場所へ訪問をする際、私達は主に車で移動をしていました。すると震災後取り壊されずにそのままになっている建物や「この先帰還困難区域に着き通行止め」と書かれた看板をよく目にしました。お店が営業し、人々が生活を送るすぐ近くでも見られる光景です。



【写真3】

大規模発電施設（メガソーラー）

建物の多くは、伸びた雑草やツタなどの植物に囲まれており、窓ガラスや壁人が住まなくなり、人の手が入らなくなると、ここまで緑で溢れかえるのか、と植物の生命力の力を見せつけられました。

道路は、今私達が通っている所は大丈夫だが、一本隣の道路や、この角を曲がった所からは立ち入り禁止、というような場所も見かけました。

どちらもこれまでテレビのニュースで目にしたことはあるものでした。しかし実際に見かけると、こんなに人も車も多いところにあるのか、ここに住む方々にとっては見慣れたものとなっているのか、と愕然としました。

今回の福島訪問では、直接見たり聞いたりしたからこそ学び、が多くありました。現地に行ったからこそ、その雰囲気や細部まで知ることが出来ました。直接お話を伺えたからこそ、より相手の想いの部分にもに触れることができたと思っています。津波や原発の被害を受けたことのない私には、福島の方々の葛藤ややるせなさを正しく理解し真に共感することは出来ません。ですが、だからといって最初から知ろうとしない、見て見ぬ振りをするのはまた違うと思います。

私達にお話をしてくださった方の多くが、復興への想いや自身の活動に関する想い、政策や支援への想い、他の福島県民への想いなどを本当に真摯にお話をしてくださいました。そのお

かげでニュースで知ることとはまた違う福島の実情な一面や復興についてより広い視野で考えられるようになったと思います。それと同時に、自分が今までどれほど知ろうとしてこなかったか、についても考えさせられました。自分から知ろうとすること、物事を複数の視点から考えること、今後の生活でも大事にしたいと思いました。

最後に。今回の訪問では多くの方々にお世話になりました。優しい方、個性の強い方が多く、この出会いや関わりは全て良き思い出となりました。復興における13年間や現地の方々と関わり、福島県が少し身近に感じました。美味しいお料理、あたたかな歓迎、本当にありがとうございました。うございました。福島訪問へ同行できて良かったです。次は1人の観光客として、福島に訪れたいと思います。

訪問中の写真は団体ウェブサイトで公開しています。
福島の風景やお世話になった方々との記念写真など
たくさんの写真がありますので、ぜひご覧ください。



アクセスはこちらから →



福島 だより 飯舘村の秋



松茸（2015年）

2015年産の葉松茸は29,000Bq/kg
（国の食品基準の290倍）でした



ホウキダケモダシ(2024年)

2024年産のホウキダケモダシは
116,500Bq/kgでした

1. 飯舘村

飯舘村は自然が豊かな村、「日本で最も美しい村連合」に加盟が許されている村です。

秋は春の山菜に次ぐ自然の恵みが実る季節です。

村の木が「赤松」、赤松の林には松茸を筆頭にたくさんキノコが出る、猪鼻茸（香茸）、舞茸などの高級キノコをはじめ、栗、アケビ、クルミも。

2. 一生分を上回る松茸を食べた話

2010年春に入村し、村の木が赤松で松茸が採れると聞いた、近くの人に松茸採れたら持つてきて頼んだ。9月末頃の夕方、松茸採れたよー！と。

800グラムほどでした、えっ、国産松茸800グラム、最低でも5万円くらい払う？、内心心配しました。いくら払えばいい？と聞いたなら5,000円でいいよとの答え、ほっとしたものです。その時は66歳、この年一年で食べた松茸は、それまでの66年間で食べた松茸を上回った、信じがたい出来事でした。

3. 城を明け渡した話

村内では松茸のほか、猪鼻茸、舞茸などの高級キノコが生える場所を“城”と呼び、その場所は親子でも教えないと言われ守られていました。

近くに住む城の持ち主の赤石澤さんが、2013年の秋に、イヤー昨日も城に行ったが松茸がニョキニョキと出た、ほかの人に見つかると思いから崖下にけり落としてきたと話していたのを聞きつけた。赤石澤さん、食べないけど測りたいから採れたら頂戴と頼んだ。

翌2014年の秋、赤石澤さん松茸採れたらお願いしますと申し出たら、明日の朝行くからついて来いと、えっ！連れてつてくれるの。親子でも教えない城の場所を、村に来て三年ばかりの赤の他人に教える？。原発事故が城を明け渡させたのですね。

その翌年も、翌々年も連れて行ってくれた、2017年の秋に、今年も宜しくとお願いしたら、もう三年も連れて行っただから一人で行けと言われましたが、中々一人ではいけません。2012年には遭難騒ぎもありました。

茸

単位: Bq/kg

種別	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年
チチタケ		76,000	500				628～ 2,162						3,664
松茸	866	3,590	3,032	7,244	5,410～ 29,000	3,493～ 14,464	7,865	2,700～ 31,745	3,833～ 5,068	2,589～ 22,108		13,319	
猪鼻茸	44,300	48,800	27,940	72,100	44,460	3,820～ 10,873	13,628～ 28,370	2,880～ 17,338	4,197～ 35,576	10,333～ 17,924	13,307～ 34,292	9,769～ 23,843	5,556～ 48,056
サクラシメジ			14,018			31,634		21,210	84,088	32,850		30,214～ 64,489	49,539
千本しめじ			988					216	176～ 860	99～300		257～ 872	439
アミタケ									8,762	11,900		21,792	93～ 17,876
はたけしめじ			255							7	5		17
村内栽培 原木椎茸	838								332				
天然椎茸			98,839										
椎茸（流通）									0～29				

原発事故の実像0240805

No	採取地	量 (単位: g)	セシウム (単位: Bq/kg)	備考
1	長泥	973	9	道路脇除染済み
2	沼平(宅地内)	10,117	25	除染済み
3	沼平(畑)	7,026	200	除染済み

栗の汚染

No	採取		Cs計 (Bq/kg)	樹種	備考
	場所	日			
1	小宮	2024/7/27	16,000	杉	表面1～2mm
2	長泥	2024/8/31	8,210	杉	"
3	長泥	2024/8/31	71,500	桜	表面の苔&黒い物質

木の皮の汚染

汚染度合いはキノコの菌種によって異なりますが、昨年でも国の基準値（100 Bq/kg）の500倍ほどのキノコもあります。菌種によっては生えている土壌（腐葉土層など）の汚染よりも濃い濃度のセシウムを含むキノコがあります、キノコ自身が体内濃縮をしていると思われるキノコもあります。

4. 測ってみないと分からない（栗の汚染）は
村内には自生の栗（山栗・シバグリ）と栽培種の丹波栗などがたくさん生産されていました。NO. 1の長泥地区は、飯舘村で汚染が激しく昨年5月によりやく避難指示が解除された地区（長泥地区以外は2017年3月末解除）です。

沼平は現在筆者が居住している地域です、しかし今年の測定の結果は、長泥が一番低い値でした、沼平の栗の汚染は8倍の違いがありました。

5. 測ってみないと分からない（木の皮の汚染）

杉の木の皮の部分の測ってみました、汚染が一番激しいはずの長泥地区と小宮地区の汚染を比較すると約二倍の差がありました（汚染が高いはずの長泥が小宮の1/2でした）。

桜の樹皮（樹皮についた苔と黒い粒子状の物）は71,500 Bq/kgでした。

これらは、2011年3月15日に付着したもので、13年を経ても付着したままです。



プロフィール

伊藤 延由
(いとう のぶよし)

1943年 11月生まれ
2010年 飯舘村の農業研修所
「いいたてふあーむ」
の管理人に就く
管理人の傍ら、水田・畑を耕作
2011年 2年目の準備を目前に被災
6月末福島市内へ避難
11月「飯舘村新天地を求める会」
を立ち上げ活動

測定すると、樹の上部よりも根本部分が高い結果です、これは13年間の雨で少しづつ流れ落ちた結果です。

これらのデータから、豊かな自然の恵みが復活するのは200年〜300年？。

セシウム134（半減期約2年）が消え、現在の汚染源はセシウム137が主、半減期が30年です。100年で1/10、300年で1/1000です。

原発事故からの復活は容易でないことがお分かり頂けると幸いです。

原発事故は罪深い！。



きのこ狩り

2021年9月26日飯舘村
大量の落ち葉の中からきのこ発見！！



香茸 いのはな

2021年9月26日飯舘村
大きく、良い香りで
おいしそうに見えます

福島訪問を振り返る（2）

2021年に開始した福島訪問も8回目となり、延べ18名（実数9名）の大学生が訪問に参加しました。

これまでの訪問で特に印象に残っている写真とその理由を参加者に伺いました。

放射性物質分析結果

注：この分析結果は参考値です。各種証明とはなりません。

2021年9月27日

今回持参された こうたけ の測定結果は以下のとおりです。

検体	試料名 採取地 測定日 重量	： こうたけ (いのはな) ： 16 歳平 ： 2021年9月27日 ： 790 g
測定場所	小宮コミュニティセンター	
測定器	NaI (TI) シンチレーションスペクトロメータ アドフューテック社製 AFT-NDA 2	
結果	放射性物質名 放射性セシウム137 (Cs137) 放射性セシウム134 (Cs134) 放射性セシウム合計 (Cs134+Cs137)	放射性物質質量 12764.0 ベクレル/kg 543.3 ベクレル/kg 13307.3 ベクレル/kg

注1：この検体は自分で食べるための確認検査です。
注2：検査結果の如何によらず、譲渡、販売はできません。
注3：譲渡、販売をする場合、県のモニタリング検査の受検が必要です。

《参考》 食品中の放射性物質の主な基準値 (ベクレル/kg)

品目	放射性セシウム 134と137の合計
飲用水	10
牛乳	50
乳児用食品	50
一般食品 (上記以外の全ての食品)	100

測定結果

2021年9月27日飯舘村
13,000Bq、あれから10年経っているのに…



リサイクル募金 ましゃぽん

ご支援・ご協力をありがとうございます！

読み終えた本やCDなどで募金ができる「古本募金ましゃぽん」を通じて、たくさんのご寄付をお寄せいただいております。

誠にありがとうございます。引き続きよろしくお願いいたします！

あなたのご自宅や職場に眠るお宝が

《 これまでにお寄せいただいた寄付額 》

◇◇ **1,402,245円** ◇◇
(472名)

／ チェルノブイリ支援につながります ／



チェルノブイリ支援コーヒー・紅茶購入キャンペーン

2024年12月末までにチェルノブイリ支援コーヒー・紅茶を合計9,000円以上

お買い上げいただいた方へ、2025年度版福島訪問カレンダーをプレゼント！

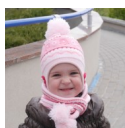
注文はメール・電話・FAXで承っております。

メール jimu@cher9.org

電話・FAX 092-260-3989

* 年内にお届けをご希望の場合は12月中旬ごろまでにご注文をお願いします。

* 福島訪問カレンダーは500円/1部で販売も行っております。



チェルノブイリ支援コーヒー・紅茶
オンラインカタログ



カレンダー
(イメージ)

◇ お知らせ ◇ 2025年度通常総会を開催します

2024年度の事業報告や決算報告等について議決をおこなう年次総会を開催します。総会の議決権を有する正会員でない方もオブザーバーとしてご参加いただけます。お気軽に事務局までお問い合わせください。

日時 2025年2月22日(土) 16:00～17:00 *予定

会場 チェルノブイリ医療支援ネットワーク事務所

(福岡市博多区博多駅東2-5-11 コスギビル5F)

* 書面や電子メール等での評決を中心とした開催方式を採用します。

事業報告・決算報告資料は総会後にウェブサイトにて公開予定です。



今回はドゥコーラという観光地をご紹介します。
紙面の都合上紹介できなかった写真はwebサイトにて公開しています。

9月だより

2024年9月(14日)、957歳になるミンスク(1067年～)、今回はこの首都から30kmほど離れた観光地くドゥコーラ>を紹介します。

ミンスクから出発したバス・ツアーで行くこと1時間、シヴィスワチ川岸に位置する16世紀～の歴史的建造物コンプレックスくドゥコーラ荘>に到着します。入り口で私達を迎えてくれたのは、民族衣装を身にまとったガイドさん達で、馬を従え、手には巨大な角笛のようなものを持ち、当時の雰囲気存分に醸し出し、中世の世界への案内がスタートします。

昔の風習を実体験できる来場者参加型のツアーで、とても新鮮でした。例えば、剣を横に寝かし持ち、その上に “サマゴン” と呼ばれる自家醸造のアルコール(60度ぐらいの)飲料が入った小さなショットグラスを置き、そのまま口に近づけ飲み干します。それから、的に向かって槍や斧を投げる練習、民族衣装をまとって当時の習わしを振り返る劇での実演参加など等、全身で楽しみながら深く歴史を学べる内容の濃いものとなっています。

その後、訪れた歴史博物館では各展示室で詳細な解説を丁寧にしてくれました。また、散策時間は馬車に乗れるサービス、プリヌイ(クレープやパンケーキに似た料理)と紅茶の昼軽食付きと、ここまで約3時間もの満足度が高い観光案内でした。

それから帰りのバスが出るまでの間は、自由行動となります。この自然豊かな場所には、歴史民俗に関するもの以外にも、まだまだ面白い場所が盛り沢山です。

なかでも印象的だったのが、全てがく逆さまの家>です。外観も内装も天地逆転した二階建て造りで、多くの観光客を惹き付けます。中に入ると、天井(上になった床)に机や椅子等の家具が逆さに張りついており、自身が歩く傾斜のある床が実は下になった天井など、少し目がまわってしまうユニークな人気モニュメントです。



剣でサマゴンを飲む風習体験
(提供写真)



逆さまの家、外観



逆さまの家、
部屋の中にて



川岸にある工房で陶器が
製造されています

この特殊な家を出ると、美しい川の流れが見渡せます。反対岸沿いには昔の生活様式が分かる家屋や、実際にそこで製造されている陶磁器の芸術品が並ぶなど見どころ満載です。

橋を渡り戻って来ると、深緑で覆われた森林が広がっています。その中を歩いてると “山姥” や “赤ずきん” のおとぎ話を語る小屋・小部屋があり、リンゴの木がそびえ立ちます。

さらに先に行くと、動物園があり、国のシンボルでもあるバイソン属の “ズーブリ” を筆頭に、シカ、ヤギ、ブタ、ダチョウ、アヒルなど多種多様な生物を見学できます。

その横には、レトロな車がズラリと並んだ博物館が隣接し、出口に向かう途中には、たくさんの(機械を使わない)アスレチックがある公園から子供達が元気にはしゃいでいる声が響いてきました。実に様々な楽しみ方ができる場となっています。

親子連れでの参加が多かったツアーでしたが、自分のお子さん達が外で(大自然のなかで)体を動かす姿を、各ご両親とも微笑ましく眺めていました。子供達は、2～3時間の自由時間では遊び(物足り)ない様子で、まだ帰りたくなさそうでした。きっと「また来たい」と思って帰路についたことでしょう。

歴史の空間で自然と付き合うことの大切さを学ばせてもらった有意義な一日でした。現代では、カメラ付き携帯を持ち歩くことが日常となっていますが(もちろん、今回もレポートのために持参は必須でしたが)、次回はそういった機械類を一切持たず行ってみたいと思えるような魅力溢れる場所でした。



ズーブリ親子



クレジットカードで
寄付ができる
“Syncable
(シンカブル)”
を導入しています。



チェルノブイリ通信のペーパーレス化を進めています

環境負荷軽減および経費削減のためペーパーレス化を進めています。団体ウェブサイトでの閲覧へ変更していただける方は大変お手数ですが、メールやお電話等で事務局までお名前とご住所をお知らせください。

メール jimu@cher9.org
電話・FAX 092-260-3989

横書きのweb版
できました！



また、会報発行のお知らせメールをご希望される方は合わせてメールアドレスもお知らせください。皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

たくさんのご支援を ありがとうございます

(順不同・敬称略)

合計

* 活動支援金	636,747円
* のぞみ21カンパ	370,247円
* 雪だるま3号カンパ	3,000円
* 東日本支援カンパ	0円
* おまかせカンパ	79,000円
* 福島訪問カレンダー	57,000円
* 福島訪問の交通費一部	500円
* 福島県産米10キロ	3,000円
* あじさいの会	76,000円
	48,000円

(2024年8月～2024年10月分の寄付内訳)

●口座受付寄付

石川睦枝 伊藤金光 榎本みつ枝 小野直子 関根敏子 高橋武三 佃あけみ 野村文子 広瀬智代香 古本募金きしゃ ぼん(運営:嵯峨野株式会社) 増田朋子 村下範子 山田秀子 山本恵 吉次康子 渡邊とみ子

貴重なご寄付をお寄せいただき、ありがとうございます。皆様よりお預かりしたご寄付は、チェルノブイリ被災者医療支援、福祉工房のぞみ21支援、東日本震災被災者支援、事務費用等にあてさせていただきます。

※通信へのお名前掲載をご承諾いただいた方のみ、ご掲載しております。

【都道府県別】

【東京都】 1名	【福島県】 1名	【千葉県】 1名
【静岡県】 2名	【愛知県】 1名	【大阪府】 2名
【兵庫県】 1名	【鳥取県】 2名	【島根県】 3名
【広島県】 5名	【山口県】 4名	【福岡県】 19名
【長崎県】 2名	【熊本県】 3名	【大分県】 2名
【宮崎県】 1名	【鹿児島県】 2名	

計52名(匿名含む)

●月々の定額寄付(マンスリースポータの皆さま)

相羽美香子 磯道綾子 一瀬和美 伊藤利恵 稲田照子
井上礼子 内野千鶴子 延壽富美 大森卓子 大久保伸子
大崎知恵 太田昌子 大場満 小黒慈子 落石久子 片山富美子
金子山涼子 紙森優子 亀川早苗 河上雅夫 川崎君子
川尻愛子 木村雅子 倉掛大輔 古賀輝洋 古賀尚子 財津耐代子
財津悠子 齊藤美代子 阪口香奈子 佐藤一江 佐藤進一
佐藤照子 白浜千恵子 末永浩子 首藤展子 高山知佐子
竹田恵子 武田孝子 田中京子 珍部千鳥 土持秀男
由利子・朱加 網脇牧子 富永隆史 鳥井原桐子 鳥原良子
永尾ゆかり 中島幸代 中島まゆみ 永野沙智子 西首延子
納富育代 深川哲臣 福井初子 福本勅子 藤本孝子 洲田三輝
古川恵子 松尾智恵子 松木幸美 松永庸子 丸山子より
水本敬子 三野桂子 宮野義治 村西美由紀 室屋芳乃
山下澄子 山本亮輔 吉田美抄子 渡邊久美子

計99名(匿名含む)

編集後記

皆様のご支援のおかげで今年も無事に1年の活動を終えることができました。ありがとうございます。来年度はなんとかわぶろし訪問を再開できないかと模索しています。(K・I)

◇表紙◇ 撮影 中筋純

タイトル 「大地の人」

撮影データ:2012年7月

チェルノブイリ 30 キロゾーン内オパチチ村
雑感:ウクライナの空が抜けるように青くなるとジャガイモの収穫期だ。ハンナ婆さんの10本の太い指が褐色の土を掘る。土塊と共に現れたジャガイモを大きな手で掴んで彼女は天を仰いだ。「おう! 今年もいい出来だ!」ウクライナの豊穡の夏。

あなたもチェルノブイリを支える一人になっていただけませんか?
ご寄付を受け付けています。

ゆうちょ銀行 記号 17460 番号 52319621
他の金融機関からは 七四八支店 (普) 5231962
楽天銀行 ジャズ支店(支店番号201) (普) 7017104
住信SBIネット銀行 法人第一支店(支店番号106) (普) 1030416
※口座名はいずれも「NPO法人チェルノブイリ医療支援ネットワーク」

本紙はチェルノブイリ医療支援ネットワークの活動を支援して下さっている皆さまへお届けしています。送付がご不要な場合は事務局までご連絡ください。

活動の様子や通信バックナンバーなどはホームページをチェック!

チェルノブイリ 医療支援

Q 検索